

特集

## 福岡市における子育ての課題と大学が行う育児支援事業

濱田 維子・井上 福江・新地 裕子

純真学園大学保健医療学部 看護学科

Challenges Facing Childcare in Fukuoka City and Childcare Support Project provided by University

Yukiko HAMADA, Fukue INOUE, Yuko SHINCHI

Department of Maternal Nursing, Faculty of Health Sciences, JUNSHIN GAKUEN University



濱田 維子

【要旨】 都市部に著明な核家族化と地域コミュニティの希薄化は、母親の孤立した子育てを助長し、児童虐待のリスクも高めている。厚生労働省は2014年から“妊娠期から育児期まで切れ目ない子育て支援”をスローガンとして掲げ、妊産婦の支援ニーズに応じて必要な支援につなぐ母子保健コーディネーターの配置や、産科医療機関からの退院直後の育児サポートを行う産後ケア事業といった事業を実施している。このような背景と若い子育て世代の転入が多い福岡市の子育てニーズを鑑み、大学の独自性を活かした育児体験教室を開始した。妊娠期の夫婦を対象としたこの育児体験教室は、大学の物的・人的資源を活用した育児支援という

地域貢献事業と看護学実習という教育事業を兼ねており、年間100名を超える参加者から好評を博している。また、教室参加者を対象に実施した質問紙調査より、妊娠期の夫婦の育児に対する不安と、夫婦一緒に体験し育児に備えたいという要望の高さがわかった。さらに教室での育児体験は、育児のイメージ化や夫婦における親役割意識の促進に繋がっており、高い満足感とともに今後の教室開催への強い要望も確認できた。今回、福岡市の子育ての課題を概観することで妊産婦の育児支援ニーズを提示し、大学の特徴を活かした子育て支援事業を紹介する。

キーワード： 育児支援、育児体験教室、大学、妊娠期、夫婦

### はじめに

妊娠期は、新しい家族を迎え親役割を獲得するための準備期間である。妊娠期の夫婦は、胎児の存在を実感し、出産・育児に向けた準備をしながら、我が子への愛着を形成し少しずつ親となることを受容していく。親役割獲得への支援は産後の育児不安を軽減させる面からも重要だとされており、各産科医療機関では妊婦を対象とした様々な出産育児準備教育が行われている。中垣らは<sup>1)</sup>、妊娠期において、児との生活がイメージできるような育児技術の指導や夫婦間での育児役割調整を促すことは、親役割獲得につながることを報告している。特に、父親認識の形成は後天的なもので、教育や体験、そして夫婦間のコミュニケーションの関与が大きい<sup>2)</sup>。しかし、産科施設や市町村で開催されている保健指導の多くは、集団を対象にした知識提供型の講義であり、いかにして妊娠期を健康的に過ごし分娩を正常で安楽なものとするかに重点がおかれている。また、産科施設では保健指導に携わる人員や時間に限界があ

り、妊婦と夫が共に産後の育児技術を体験し気軽に相談できる機会を提供するのは難しいのが現状である。

さらに、核家族化や地域コミュニティの希薄化は、母親の孤立した子育てを助長し、育児不安の増加につながっているとされており<sup>3)</sup>、都市部における育児支援ニーズは特に高いことが予測される。2014年より厚生労働省は、少子化対策と児童虐待防止を目的として、“妊娠期から育児期まで切れ目ない子育て支援”を打ち出した<sup>4)</sup>。医療系大学が、保健・医療・福祉の視点を持ってその一端を担うことは、大学の独自性を生かした期待される地域貢献だと考える。

そこで、本学では2016年より地域貢献の一環として、大学だからこそできる育児支援事業をスタートさせた。本稿では、1. 大学が位置する福岡市の子育てをめぐる課題と、2. 大学が取り組む育児体験教室の実践報告およびその効果について述べる。

## 1. 福岡市における子育ての課題

福岡市は、九州の政治、経済、文化、ファッションの中心として賑わうエネルギッシュな街で、豊かな食文化も加わり、全国の政令市の中でも住みやすい街1位と人気の高い都市である<sup>5)</sup>。また、交通アクセスが良好でビジネス環境が整っており、市民の幸福度が高い「成長可能性の高い都市」としても、東京都に次いで全国第2位にランキングされている<sup>6)</sup>。実際、地方都市の多くは人口流出が大きな課題となっているが、福岡市の転入超過は全国5位であり、1年間に8,000人を超える人口増加がみられている。そして、転入者の40%以上は、25～44歳の子育て世代である<sup>7)</sup>。

一方で、福岡市では0歳児の子どもがいる世帯のうち93.5%を占める1,200世帯が核家族であり、全国の核家族率に比べて6.6ポイントも高い<sup>8)</sup> (図1)。子育て環境の視点からみると、全国的に進む核家族化は、初めての妊娠・出産・子育てを経験する世代には支援者が得にくく、孤立した育児を招きやすい。また、インターネットの情報に振り回され、育児不安を募らせるケースも多くみられる。福岡県の県民意識調査<sup>9)</sup>では、「地域で育児を助け合う環境が充分整備されていない」、「母子医療システムが充実していない」と感じている者が7割を超えており、育児環境にも課題があると考えられる。

また、母親の育児不安や負担感は、児童虐待につながるケースもある。吉岡らの調査では<sup>10)</sup>、要支援児童（児童福祉法において定義された用語。児童虐待のハイリスク群であり、子育てに対して強い不安や孤立感等を抱えている親に育てられている児童や、不適切な養育状態の中で生活している児童を含む）の母親には、パートナーとの関係性に問題があること、乳児期の育児困難感があることが指摘されている。福岡県における児童虐待相談件数は、平成24年度に初めて1,000件を超え、平成25年度以降900件台に減少していたが、平成28年度においては過去最高の2,000件を一気に超えて急増している。被虐待者を年齢別にみると、すべての年齢層において心理的虐待の割合が高くなっているが、3歳未満の乳幼児では保護の怠慢・拒否（ネグレクト）の比率が高い<sup>11)</sup>。つまり、親の愛情と手厚い養育を最も必要とする乳幼児期に、育児に強いストレスを感じた母親が養育を放棄してしまうという深刻な状況が推測できる。要支援児童の母親は虐待のリスクを持たない順調に経過した妊婦だったという報告もあることから、育児期を見据えた妊娠期からの育児支援は、福岡市における虐待予防支援としても重要課題だと考える。

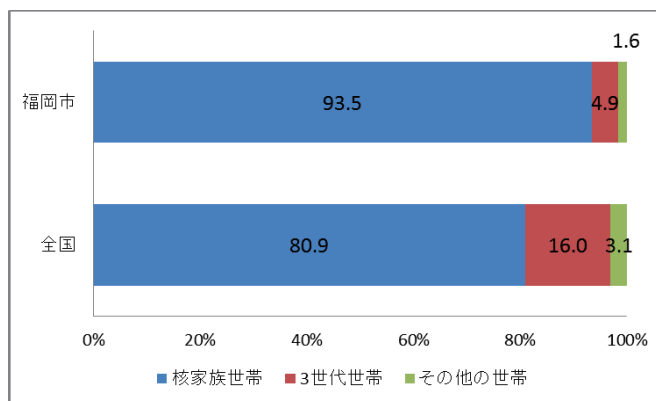


図1. 子どもがいる世帯の状況（福岡市と全国の比較）

## 2. 大学が開催する体験型育児教室とその評価

### 1) 体験型育児教室の目的

本学で開催している育児体験教室の目的は、妊婦とその家族を対象として、沐浴を中心に新生児のおむつ交換や抱っこ、授乳の仕方などの基本的な育児技術を体験し、育児技術の習得とともに育児のイメージ化を図ることである。また、妊婦体験ジャケットを用いた夫の妊婦体験も企画し、妊婦への理解と父親役割意識を促す。さらに、これらの体験を通して、育児期における夫婦・家族間の役割調整を考える機会を提供することを目的としている。

### 2) 対象

対象は、福岡市に在住する妊婦とその家族（夫、親、子ども）であり、毎回10組を定員としている。

### 3) 運営方法

教室運営は、母性看護学領域の看護教員（助産師）3名を中心に、母性看護学実習または総合実習の位置づけとして参加する看護学科3年もしくは4年次生5～10名と、複数名のボランティア学生で行っている。学生は企画から関わり、教員の指導の下で保健指導案の作成、基本技術の習得、会場設営を行う。当日は、参加者1組毎に担当学生を決定し、各体験での助言や誘導を行う。教員は、参加者や学生の状況に応じて必要な助言や調整、個別相談に対応している。

### 4) 内容

#### (1) 開催日時・参加者数

平成28年11月より平成29年11月まで計7回の教室を開催した。開催日は夫の参加を促すため、土曜日に設定した。参加者数は合計60組122名に上る（表1）。その内、53組は夫婦で参加されそのほとんどが初産婦だったが、上の子どもと一緒に5組の経産婦夫婦と、友人や妹と一緒に2組の妊婦も参加された。

表1. 平成29年度 育児体験教室 参加者

実施日時	参加家族数(人数)	内 訳	初産・経産の別
平成28年11月26日(土)	9組(17名)	夫婦(6組)、夫婦と子ども1名(1組)、妊婦と妹(1組)、妊婦のみ(1名)	初産婦8名/経産婦1名
平成29年 2月11日(土)	10組(20名)	夫婦(10組)	初産婦10名
平成29年 5月20日(土)	5組(12名)	夫婦(3組)、夫婦と子ども2名(1組)、妊婦と友人(1組)	初産婦4名/経産婦1名
平成29年 6月17日(土)	9組(19名)	夫婦(8組)、夫婦と子ども1名(1組)	初産婦8名/経産婦1名
平成29年 9月 9日(土)	9組(18名)	夫婦(9組)	初産婦8名/経産婦1名
平成29年10月28日(土)	9組(18名)	夫婦(8組)、夫婦と子ども1名(1組)	初産婦8名/経産婦1名
平成29年11月25日(土)	9組(18名)	夫婦(9組)	初産婦9名
合計	60組(122名)	夫婦(53組)、夫婦と子ども(4組)、その他(3組)	初産婦55名/経産婦5名

#### (2) 実施内容

実施内容は毎回同様で、1. 新生児人形を使った沐浴のデモンストレーションと体験、2. 抱っこ・おむつ交換の体験、3. 授乳の仕方と排気の体験、4. 夫の妊婦体験（妊婦体験ジャケット装着後の日常生活動作の体験）を主な体験項目として、妊婦と夫それぞれが体験できる時間を設け、担当学生と教員がマンツーマンで支援している。媒体には、大学で作成したテキストや沐浴手順を記載したパネル（写真1）を使用し無料配布している。学生からの提案も積極的に採用し、毎回、内容に工夫を加えている。例えば、胎児発育モデルの展示と各参加者の妊娠週数に合わせた胎児の能力についての説明、葉酸や鉄分を摂取できる簡単なデザートを試食と妊娠期に必要な栄養についての情報提供、夫婦で日頃の感謝と要望を伝えあう茶話会の設定など、3時間の教室開催時間の中で可能な内容と妊娠期に必要な情報について、妊婦とその夫の視点から検討し、各回で調整・工夫している（写真2、写真3）。



写真1. 沐浴手順を示したパネル

写真2、写真3）。





写真2. 学生による沐浴のデモンストレーション



写真3. 上の子と一緒にむつ交換体験

## 5) 評価

各教室終了時、参加者に質問紙への協力を依頼しその結果を集計、分析した。質問紙は、参加動機（自由記述）、開催日への要望、教室開催への希望、教室への評価・感想（自由記述）、育児のイメージ化、胎児へ愛着等の設問にて構成した。なお、参加者には、調査の目的は妊婦とその家族の要望に応じた育児教室を目指すものであること、調査への協力は自由であり、提出しなくとも不利益は生じないこと、無記名で個人が特定できないようデータ処理を行うことについて、口頭および文書にて説明した。同意が得られた妊婦と夫に調査票を配布し、会場出入り口に設置した回収箱への投函を依頼した。回収率は100%だった。

### (1) 参加動機

参加動機に対する自由記述について類似する内容を整理し、「育児への不安」、「実践的な学習への要望」、「夫としての期待もしくは夫への期待」、「夫婦や家族での参加希望」の4つの項目に分類された（表2）。圧倒的に多かった参加動機は、出産後の「育児への不安」だった。参加者の9割以上は初産婦が占めており、『初めての育児でわからないことばかりで不安だから』という記述が複数みられた。『身近に幼い子どもと触れ合う機会もなかったから』や、『里帰りをしないから不安』つまり夫以外の育児支援者がいないという背景、そして『沐浴が不安』という具体的な育児技術に対する不安も記述されていた。「実践的な学習への要望」では、「体験型」の育児教室という点に興味関心を持った参加者が多く、体験することで育児に関する知識や技術を身につけたいという明確な目的意識が記載されていた。また、参加した60組中5組は経産婦だったが、過去の育児体験を思い起こすために参加したという動機も見ら

表2. 参加動機

育児への不安	実践的な学習への要望	夫としての期待・夫への期待	夫婦や家族での参加希望
<ul style="list-style-type: none"> <li>初めての育児でわからないことばかりだから。</li> <li>不安な気持ちを解消したい。</li> <li>沐浴が不安だった。</li> <li>子育てに不安を感じていたため。</li> <li>今まで身近に赤ちゃんに触れ合う機会がなかったため。</li> <li>出産後、里帰りをしないので不安だったから。</li> <li>出産後、日中は一人だから練習したい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>わからないことを教えて欲しかった。</li> <li>初めてなので実際に体験できる教室を選んだ。</li> <li>実際に体験できる教室は他になかったから。</li> <li>実際は慌てず対応できるようにするため。</li> <li>妊娠中に心や物品の準備をするため。</li> <li>初めての子どもなので、しっかりした知識を身につけたかった。</li> <li>沐浴や抱っこを習いたかった。</li> <li>妊婦健診ではここまでの内容は教えてくれない。</li> <li>プロ(専門職)に指導してもらいたかった。</li> <li>2回目だけど6年差があり、忘れていた部分もあるのでもう一度勉強のため。</li> </ul>	<p>&lt;妊婦&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>父親の自覚が芽生えるよう。</li> <li>夫に妊婦の気持ち、大変さを理解してもらいたい。</li> <li>父親になるための意識を高めて欲しい。</li> <li>夫に育児参加をして欲しいから。</li> </ul> <p>&lt;夫&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>妻から半強制的に。</li> <li>奥さんに言われて。</li> <li>育児は夫婦で協力することが重要だから。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>平日開催の教室には夫が参加できない。</li> <li>夫婦で参加できる教室がない。</li> <li>夫婦で参加したかった。</li> <li>上の子ともたちと一緒に参加したかった。</li> <li>夫と一緒に参加して出産に備えたかった。</li> </ul>

れた。「夫の期待・妊婦から夫への期待」では、『日常生活や思いを共感して欲しい』、『父親となる意識を持って欲しい』という妊婦の夫への要望が記載されていた。夫の参加動機は、妻から参加を促された参加と夫自身の主体的な参加の2つのケースがあった。

教室の開催は、夫やその他の家族と一緒に参加しやすい土曜日13:00～16:00に設定した。開催曜日に対する設問では、92%の参加者が土・日曜日の週末を希望していた。参加動機の中には、他の施設での母親学級等の開催は平日が多く夫が参加できなかったことや、身近に夫婦で参加できる育児教室がなかったことが挙げられおり、あらためて、夫婦や家族で参加可能な育児教室への高いニーズを確認できた。

## (2) 教室への評価

今回のような体験型育児教室の参加を希望するかという問いについては、『どちらでもない』(1名)を除いた全参加者が『希望する』と答えており、ニーズに沿った教室を企画・開催できたことが確認できた。

また、参加後の感想(自由記述)について類似内容を整理し、「育児のイメージ化」、「個別対応への満足感」、「夫婦における役割意識の促進」、「胎児への愛着促進」の4つの項目に分類した(表3)。

「育児のイメージ化」では、話を聞いたり見学したりするだけではなく、実際に沐浴・抱っこ・授乳体験を通して育児へのイメージがついたという感想が多くを占めていた。新生児モデル人形を活用した育児体験は、育児経験のない夫婦において育児のイメージ化につながるということがわかった。また教室は、3名の教員の他、企画に携わり育児技術練習を重ねた複数の学生によって運営し、10組の参加者に対する個別対応を行った。一般的な基礎知識や技術、情報については学生より説明し、その補足や個別相談に対しては教員が対応する体制を組んだところ、病院では確認できなかった事柄も気軽に質問できる場を提供することができた。そのような運営が、「個別対応への満足感」として、安心して楽しく学ぶことができたという評価につながったと思われる。「体験」というキーワードは大きな参加動機にもなっていたが、「夫婦における役割意識の促進」では、妊婦体験を含め、妊婦と同様に夫が沐浴や授乳を体験することで、夫における妊婦への理解や育児参加への意識向上が感じられた。また、妊婦の記述においては、夫の自分への理解や父親役割意識を感じたことで満足感が得られていた。何より、各体験において夫婦で感想や疑問を話し合う様子が見られ、この教室が夫婦で育児について考える機会となっていることを確認できた。

さらにすべての参加者において、『育児へのイメージがついた』、『お腹の赤ちゃんへの思いが強まっ

表3. 育児体験教室への感想・意見(自由記述)

育児のイメージ化	個別対応への満足感	夫婦における役割意識の促進	胎児への愛着促進
<ul style="list-style-type: none"> <li>不安なことが理解でき安心できた。</li> <li>沢山の体験ができて育児が楽しみになった。</li> <li>今まで赤ちゃんにふれたことがなかったのですごくいい体験ができた。</li> <li>5年ぶりで忘れていたことも多く、勉強になった。</li> <li>実践形式で教えてもらえる機会は少ないのでとても勉強になった。</li> <li>実際に体験できて育児がイメージができた。</li> <li>自信がついた。</li> <li>1人当たりの体験時間が十分あり満足。</li> <li>3時間があっという間だった。具体的な準備(育児物品等)をしようと思った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>病院では聞けないこと、知りたいたことが聞けた。</li> <li>学生の説明が丁寧でわかりやすかった。</li> <li>教員と学生が常に声をかけてくれて安心した。</li> <li>とても楽しかった。主人も子どもたちも楽しく参加できてよかった。</li> <li>生まれた後でも参加したい。</li> </ul>	<p>&lt;夫&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>妻の苦勞が身に染みてわかった。</li> <li>妊婦は大変だとわかった。</li> <li>良いパパになれるよう頑張る。</li> <li>家事を積極的に行うことにする。</li> <li>一人でするのは大変なので夫婦で協力しようと思った。</li> </ul> <p>&lt;妊婦&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>授乳体験を夫婦で行ったことで、『げっぷは自分が担当だね』と夫が言ってくれて不安が軽減しそう。</li> <li>夫に理解してもらえたことが一番の収穫。</li> <li>主人にも体験してもらえたのが一番良かった。</li> <li>育児について夫婦で話そうと思った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生まれるのが楽しみになった。</li> <li>育児が楽しみになった。</li> <li>お腹の赤ちゃんへの思いが強まった。</li> </ul>

た』という回答が得られたことから、育児教室での育児体験が、育児へのイメージ化とともに胎児への愛着促進にもつながることが期待できた。

### 3. 子育て支援における大学の地域貢献

#### 1) 大学が取り組む体験型育児教室の運営と意義

大学において体験型育児教室を可能にしている要件として、看護系大学の人的・物的資源の活用が大きい。参加者にとっては、十分な時間をかけた体験と学生や助産師である教員からの情報提供を享受でき、一方で、大学の教育的側面では、看護学生が看護学実習の一環として妊婦と交流し、保健指導を実践し評価するという貴重な学習機会を得ることにつながっている。

核家族において初めての妊娠・出産・育児をめぐる課題は、育児への不安や学習機会の希求という今回の参加動機からも明らかである。特に初産婦は経産婦よりも育児に対する困難感が強く、新生児の理解と対応に関するニーズが高いことが報告されている<sup>12)</sup>。母親の育児負担感には、「育児知識と技術不足」、「サポート不足」が関連しており、核家族化による母親への支援不足が指摘されていることから<sup>13)</sup>、初めて親となる夫婦の育児不安を少しでも軽減し、育児の楽しさや児への愛情を感じる機会を提供することは、現代の子育て課題に対して大学が担う大きな地域貢献だと考える。

一方、母性看護学実習においては、少子化に加えて看護系大学の増加により実習施設の確保が非常に厳しい状況にある。学生が、妊娠期の夫婦を対象とした出産育児準備教育に主体的に関わることは、母性看護の対象を理解し、育児支援の必要性を身を持って学ぶ貴重な機会となっている。本事業の継続は、地域貢献と教育効果の両側面において大きな意義を持つと言える。

#### 2) 夫婦を対象とした育児教室の意義

本学の育児体験教室は、父親役割意識と子育てにおける夫婦間役割調整の促進をめざして、夫婦での参加を条件としている。一部の産科施設においては、両親学級と称して妊婦とその夫を対象とした出産育児準備教育が試みられているが、一般的には妊婦を対象とした講義形式の教室が多いのが現状である。我が国の父親が家事・育児に費やす時間は増加傾向にあるとはいえ、1日当たり67分と他の先進国の3分の1に過ぎない最低の水準にとどまっている<sup>14)</sup>。妊娠期に妻と一緒に出産育児準備を持った夫ほど育児に対する意欲が高まり、実施に至ることが報告されていることから<sup>15)</sup>、父親が参加しやすい出産育児準備教育の充実が父親の育児参加にもつながると考える。また、妊娠期の妻が育児教室への参加を促すなど夫に働きかけることは、夫の父親となる意識に繋がり、夫婦で子どもを育てるという意識の共有が強化されることが示唆されている<sup>16)</sup>。育児体験教室を通して、夫が母親となる妻の状況や思いを知り、夫婦間で具体的な子育てに対する会話をしていたことは、夫婦協働で子どもを迎える準備のきっかけになると考える。

#### 3) 大学が発信する切れ目ない育児支援ネットワークを目指して

育児体験教室の開催が決まった際、複数の大学近隣の産科医療機関や地域保健福祉センターの理解を得て、妊婦への紹介やポスター掲示に多大な協力を頂いた。また、大学公開講座の位置づけとして、大学広報からも積極的な発信を行った。教室に参加したご夫婦からは、ご好意による出産報告と出産後の夫婦を対象とした育児教室への期待が寄せられている。今後は、大学が地域の医療施設や行政、保育士や栄養士といった他職種とも連携しながら、共に、支援ニーズに沿った妊娠期から切れ目ない育児支援ネットワークを作ることを目指したいと考えている。

### おわりに

育児不安や育児負担を解決に導き、子育てを楽しめる社会をめざした子育て支援は、社会全体で取り組むべき課題である。そのような中、地域特有のニーズをとらえながら、大学の特長を活かして大学で可能な支援を、地域と連携しながら継続的に取り組んでいくことが、大学の使命だと考える。



## 文献

- 1) 中垣明美, 千葉朝子. 産後3・4か月の母親役割獲得と妊娠中における産後の身体的変化へのイメージや産後の生活・育児に対する夫婦間調整との関係性. 日本助産学会誌 J Jpn Acad Midwif 26 (2), 211-221, 2012.
- 2) デッカー清美, 丸山昭子. 父親認識に関する文献研究. 日本農村医学界雑誌 64 (4), 2015.
- 3) 太田ひろみ. 都市部での子育てをめぐる課題と大学が行う子育て支援活動. 杏林医会誌 45 (3), 101-104, 2014.
- 4) 厚生労働省, 地域における切れ目ない妊娠・出産支援の強化について.  
[www.mhlw.go.jp/topics/2015/02/dl/tp0219-13-03p.pdf](http://www.mhlw.go.jp/topics/2015/02/dl/tp0219-13-03p.pdf)
- 5) 経産消費研究所, ビジネスマン1,000人へのアンケート調査 (2016年), 2018-2-20. <http://facts.city.fukuoka.lg.jp/data/favorite-place/>
- 6) 野村総合研究所, ランキングによる都市の持つ「成長可能性」の可視化 2017年 第255回 NRI メディアフォーラム .2018-2-20. [https://www.nri.com/jp/news/2017/170705\\_1.aspx](https://www.nri.com/jp/news/2017/170705_1.aspx)
- 7) 総務省統計局, 平成28年度 住民基本台帳人口移動報告 .2018-2-20.  
<http://www.stat.go.jp/data/idou/2016np/kihon/youyaku/index.htm>
- 8) 総務省統計局, 平成27年国勢調査. 2018-2-20. [www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/](http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/)
- 9) 福岡県, 福岡県の子育てに関する県民意識調査 (平成25年度版) .2018-2-20.  
<http://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/kosodateishikityousa25.html>
- 10) 吉岡京子, 鎌倉由起, 神保宏子, 北澤陽子他. A 自治体における要支援児童とその母親の特徴の検討: 保健師の判断と組織的検討による児童虐待の可能性の高低に基づく比較. 日本公衆衛生看護学会誌 JJPHN 6 (1), 10-18, 2017.
- 11) 福岡県. 福岡県児童相談所業務概要 平成29年度版. 2018 -2-20.  
<http://www.pref.fukuoka.lg.jp/gyosei-shiryo/h29-jidousoudansho-gyomugaiyou.html>
- 12) 神崎光子, 産後1ヶ月の母親の育児困難感とその他の育児上の問題, 家族機能との因果的関連. 女性心身医学 19 (2), 176-188, 2014.
- 13) 岩淵祥子, 奥澤聡子, 神川洋平, 川崎有亮 他. 母親の育児負担感への寄与因子の検討に関する研究. 信州医学雑誌 57 (5), 155 - 161, 2009.
- 14) 内閣府. 6歳未満の子どもを持つ夫の家事・育児関連時間 (1日当たり・国際比較), 2018-2-20.  
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/img/ottonokyouryoku2.gif>
- 15) 池田友美, 入山茂美. 妊娠期に夫婦で行う出産育児準備と夫の育児意図の関連 母性衛生 55 (1), 2014.
- 16) 中島久美子, 常盤洋子. 妊娠初期の妻が満足と感じる夫の関わりにおける夫婦の認識. 日本助産学学会 J Jpn Acad Midwif 25 (1), 45-56, 2011.